

(様式2)

---

[成果情報名] 早生の完全甘ガキ新品種「陽秋」

[要約] 「陽秋」は収穫期が9月中旬の早生の完全甘ガキである。糖度は「西村早生」より2度程度高く、着色や食味が優れる。着果率は「西村早生」と同等で単為結果力が高い。

[キーワード] 早生、完全甘ガキ、着色良好

[担当部署] 果樹部；果樹育種・栽培チーム

[連絡先] 092-922-4946

[対象項目] 果樹

[専門項目] 育種

[成果分類] 新技術

---

[背景・ねらい]

本県カキ生産における早生の主要品種は9月から出荷される「西村早生」であるが、不完全甘ガキ品種であるため、渋果が4割程度発生し、その判定にかかる生産者の労力的負担や渋果の廃棄による出荷量の減少、果実品質が劣るなどの課題がある。そのため、9月に収穫できて「西村早生」より着色や肥大、食味に優れ、安定した収量が確保できる完全甘ガキ新品種を育成する。

(要望機関名：朝倉普 (H27)、JA全農ふくれん (H30))

[成果の内容・特徴]

1. 「陽秋」は、着色が良い種子親「早秋」と糖度が高い花粉親「甘秋」の交雑から育成された早生の完全甘ガキ品種である(図1)。
2. 「陽秋」の展葉期は3月22日で「西村早生」と同程度、開花盛期は5月15日で「西村早生」よりも3日程度遅い。着蕾数は「西村早生」よりも多く、雄花の着生はない。着果率は「西村早生」と同程度である。樹勢は中で樹姿は斜上である(図2、表1、一部データ略)。
3. 花粉遮断した「陽秋」の着果率は、自然受粉と差がなく、単為結果力が高い(データ略)。
4. 収穫期は9月中旬である。「西村早生」と比べて、9月中旬において、果重が200g程度と果実肥大が良く、果実糖度が約16度と高く、果汁が多く、食味が優れ、果皮色も良い。果皮の汚損や条紋がみられるものがあるが、発生は軽微である。日持ち性は「西村早生」と同等である(表1、表2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 完全甘ガキ品種であるため、渋果の廃棄がなくなることや、渋果判定が不要なことから「西村早生」に比べて生産者の労力軽減が図られる。
2. 着色期以降の降雨や高湿度により、果皮の汚損や条紋が発生する場合があるため、導入に当たっては園内の通風や採光に留意する。

[具体的データ]



図1 「陽秋」の果実外観および断面



図2 「陽秋」の樹姿

表1 「陽秋」の生育特性（令和元～5年）

品種	展葉期	開花盛期	樹勢	結果母枝当たり		収穫期
				着蕾数 (個)	着果率 (%)	
陽秋	3/22	5/15	中	16.9	96.8	9月中旬
西村早生	3/22	5/12	やや弱	9.9	97.2	9月下旬

注) 1. 筑紫野市における令和元～5年の5カ年の高接ぎ樹データの平均。  
令和元年時点で、「陽秋」は高接ぎ5年目、「西村早生」は42年生。

表2 9月中旬における「陽秋」の果実品質（令和2～4年）

品種	果重 (g)	果皮色 (果頂)	硬度 (kg)	糖度 (° Brix)	汚損 (0-3)	条紋 (0-3)	日持ち性 (日)
陽秋	205	6.7	2.0	16.1	0.8	0.4	16.0
西村早生	189	5.2	3.4	13.7	0.0	0.0	15.0

注) 1. 筑紫野市における令和2～4年の3カ年の高接ぎ樹データの平均。  
2. 果皮色はカラーチャート数値で、値が大きいほど色が濃いことを示す。  
3. 汚損および条紋は0(無)、1(少)、2(中)、3(多)の4段階評価で、平均で表示。  
4. 日持ち性は、室温で静置後、外観と触感で判定。

[その他]

研究課題名：早生の完全甘ガキ品種の開発

予算区分：経常

研究期間：令和5年度（平成31～令和5年）

研究担当者：竹村智佳、朝隈英昭、津田宗一郎、児玉葉津希